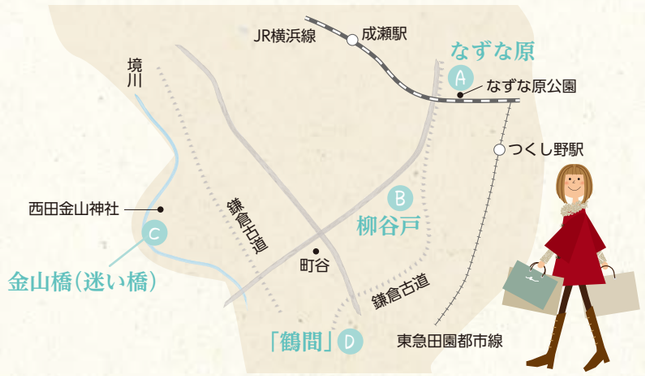
南 地区

昔話の地をたどる

鶴間から小川、成瀬にかけて、古道沿いに昔話や伝説が伝えられ、それにかかわる「なずな原」や「鶴間」などの地名がみられます。また、東海道から武蔵国府を通って陸奥へ行く通り道として古道があったようで、鶴間の「町谷（まちや）」の地名は、平安時代中期の※延喜式に官道の駅として記載されている「店屋（まちや）」に由来するとの説もあります。そうであるとすると、南地区は古来の交通の要衝だったと考えられます。



C 金山橋（迷い橋）
かなやまばし

小川の柳谷戸から北に道をとった西行法師は、道端で子どもらと歌問答をして負けてしまい金森の金山橋まで来て道に迷ったことに気づいたので「迷い橋」ともいわれています。金山橋は近くの金山神社にちなむ名前です。鍛冶や製鉄の金屋子神を祀ります。境川の対岸にも金山神社があり、川をさかのぼって移住した人々が鍛冶や鉄の技術をもってきたことを感じさせます。金森の地名の由来に関係しているかもしれません。

西田金山神社

A なずな原
なずなはら

小川から成瀬へ下っていくところの平地で、一帯を治めていた齊原（なずなはら）尊綱にちなんだ地名といわれます。なずな長者の娘が夜な夜な通ってくる男を訪ねると三島神社の蛇（神）だったという伝説があります。東急電鉄の電車基地建設にあたり大規模な発掘が行われ、旧石器時代から平安時代におよぶ遺跡が発掘されました。縄文草創期の隆起線文土器や精巧な細工の土製耳飾りなども出土しました。

隆起線文土器

B 柳谷戸
やなぎやと

夏、弘法大師が柳の杖を突きさすとたちまち根が生えて、涼しい柳の木陰になったという伝説があり、その後、西行法師が鎌倉から陸奥へと向かう途中、その柳の木の下で休息したという伝説があります。古い時代の道筋にあたっていたのでしょうか。

小川柳谷戸公園

D 「鶴間」の地名伝説

「つる」は水路・河川など水のある場所を指し、「ま」はその間際の地を表すので、地形が由来になったとも考えられます。一方、源頼義・義家父子が奥州への途中に立ち寄った時、たくさん鶴が舞っているところを見て鶴舞の里だと言ったことから、「つるま」と名付けられたとの伝承があります。

※平安時代の法令集

町田かるたプロジェクト

郷土の魅力 口ずさもう

本町田遺跡公園に集まったプロジェクトメンバー

町田かるたプロジェクトの須藤晏男代表は、かつて遊んだ「上毛かるた」の読み札を大人になった今でもそらんじることができる。「群馬県民の誰もが小学生の時にこの郷土かるたを暗唱し、地元の歴史や文化を誇りに思うんです」とにっこり。

「まちだ〇ごと大作戦」の決定を受け、プロジェクトは2020年にスタート。元教員ら約10人の有志と協力し、市内で誇るべき歴史や文化、自然などを遊びながら学べる郷土かるたを制作している。

読み句の文案を担当する元鶴川第二中学校長の千田実さんは「五七五の17音で史実に基づいて背景まで作文するのはなかなか難しい」と苦笑い。44の読み札の推敲をメンバーと重ねているところだ。子どもでも親しめるよう読みやすさに配慮し、読み札の裏側に句の解説文も添えるつもりだ。

試作中の読み句「古代の世家の復元 本町田遺跡」は、遺跡公園に再現された竪穴住居を紹介。「小山田城 跡に建つのは大泉寺」は鎌倉時代の御家人、小山田氏の城があることを伝えている。「狸行く かしの木山の 地下トンネル」と、成瀬のタヌキトンネルを読んだものもある。

須藤さんが町田の魅力に気づいたのは、会社経営を定年でリタイアしてから。多摩丘陵やなすな原遺跡、小野路宿など地元の成り立ちを学ぶ楽しさを知ったという。メンバーの大谷光雄さんも「教科書に載っていない知られざる地域の歴史が町田にもたくさんある。かるたは文化的基盤を市民で共有する良いきっかけになるのでは」。

絵札は、玉川大学芸術学部の学生にデザインを依頼し、21年度から本格着手する見通し。プロジェクトは市内全小中学校への配布を考え、年内までにかるたを制作する予定だ。

元南大谷小学校長でメンバーの西岡郁雄さんは「地域を学ぶ資料教材はあるが、子どもが口ずさんで暗唱できるのがいい。町田の魅力をぱっと口にできるようになって」と話している。

群馬県の上毛かるた